

唐のカンニユウ卿 から きょう  
新潟

むかし、あるところに、唐のカンニユウ卿という大金持ちがありました。その家に、男の子が生まれました。ところが、その子は、いつもむずかって泣いてばかりいました。母親も乳母も、こまりはてていました。

あるとき、男の子が泣いていると、天井から、虫がいっぱい、糸を引いて下りてきました。それがとても美しい虫だったので、乳母はふしげに思つて、針の先でちゃんと虫をついてみました。虫は、その針の先をクンと食べてしましました。またちゃんとつくると、またクンと食べます。とうとう一本の針ぜんぶ食べてしまいました。すると、今までどうしても泣きやまなかつた子どもが、急にきげんがよくなつてにこにこ笑いだしました。

乳母は、

(おかしなこともあるもんだ)と思つて、旦那さんに話しました。旦那さんは、だんな「ほんとうか」といつて、虫を針でつつきました。するとやつぱり、クン、クンと、ぜんぶ食べてしました。

子どもは、その虫さえ見ているとおとなしいのですが、虫が見えなくなるとすぐに泣きだします。そこで旦那さんは、虫に針を食べさせて大切に飼うことにしました。

やがて虫はだんだん大きくなつて、しまいに、釘くぎを食べるようになりました。それからまた大きくなつて、鉄の棒てつぼうを食べるようになりました。そうして虫は、とうとう牛ほどの大きさになりました。

旦那さんは、さすがに氣味が悪くなつて、虫をころしてしまおうと考えました。ところが、鉄を食べて育つたのですから、体がかちかちにかたくて、こん棒ぼうで打つても、刀で切つても死にません。思案にあまつて、千挺せんぢょうの踏鞴たたらを立てて虫を焼くことにしました。虫は苦しがつて、家を飛び出していきました。そのとき、まつ赤に焼けた虫が、カンニユウ卿の家の門に触れて、あつというまに火事になつて、家がぜんぶ燃えてしました。

それからというもの、一夜のうちに貧乏になつた者を、唐のカンニユウ卿というようになつたそうです。